

使って欲しい 新技術

夏秋ピーマンの1本仕立て誘引による 作業性 収量性の向上

県内の夏秋ピーマンの主枝の誘引方法は、ネットを水平に3段程度張る「ネット誘引」が主体であるが、この方法は、茎葉が繁茂し易いために整枝がしにくく、収穫に時間を要する。特に7～8月の盛夏時期は収穫がピークとなり、ハウス内での収穫作業が長時間となり体への負担が大きい。そこで、作業性や収量性の向上に有利な「1本仕立て誘引」について紹介する。



収穫時の作業姿勢(上: 1本仕立て 下: ネット誘引)

1. 1本仕立ての誘引方法

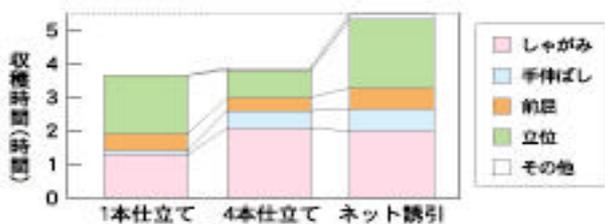
第1分枝節から出ている2～3本の主枝のうち、1本を紐で垂直に誘引し、他の主枝は第1分枝で捻枝する。捻枝した枝に着果する果実は収穫し、5～6節に伸びた頃に捻枝部位で剪定する。下部の側枝は5～6節で、上部の側枝は3～4節で摘心し、樹形状になるように整枝する。主枝は、栽培者が手を伸ばした高さで摘心する。栽植様式は、畦幅120～135cm、株間35cm、栽植密度2,116～2,381株/10aを基本とする。

2. 作業性

「1本仕立て」の収穫時の作業姿勢は、「4本仕立て」や「ネット誘引」に比べ手を伸ばしたりしゃがんだりする姿勢が少なく、作業時間が短くなるので、体への負担が軽減される(写真、第1図)。100kg当たり収穫時間のうちしゃがみ、前屈及び手伸ばし姿勢の作業時間の合計は、「1本仕立て」が2.0時間で、「4本仕立て」と比較して16%、「ネット誘引」と比較して43%の短縮が図られる。特に、しゃがみ姿勢の作業時間は、「1本仕立て」が1.4時間で、「4本仕立て」と比較して35%、「ネット誘引」と比較して33%の短縮が図られる。

3. 収量性・経済性

3ヶ年の10a当たりの平均収量は、大型ハウスでは「1本仕立て」が19.5t、「4本仕立て」が16.2t、ミニハウスでは「1本仕立て」が17.8t、「ネット誘引」が16.4tで、いずれのハウスでも「1本仕立て」の方が、収量が多かった(第2図)。また、「1本仕立て」は栽植株数が多いために、単価の高い収穫初期の収量の増加がみられ、「1本仕立て」は「ネット誘引」に比べ、約15万円(増加分の収量1.4t×過去3ヶ年の平均単価264円/kg×所得率40%で試算)の所得の増加が見込まれる。



第1図 収穫時の作業時間数(100kg当たり)



第2図 仕立て方法別の収量(10a当たり)

(畑地利用部)